

## スリランカ生活事情

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学経営学研究所 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳重, 善之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12026">http://hdl.handle.net/10291/12026</a>

# スリランカ生活事情

徳重善之

- 一、はじめに
- 二、国家体制
- 三、国土と人口
- 四、雇用と所得
- 五、物価と生活
- 六、交通事情
- 七、おわりに

## 一、はじめに

スリランカは印度の南方、印度洋に浮ぶ椰木とバナナの木に覆われ、美しい海岸線をもった、新しい小さな独立国である。

## スリランカ

スリランカ

面積 6.56 万km<sup>2</sup>

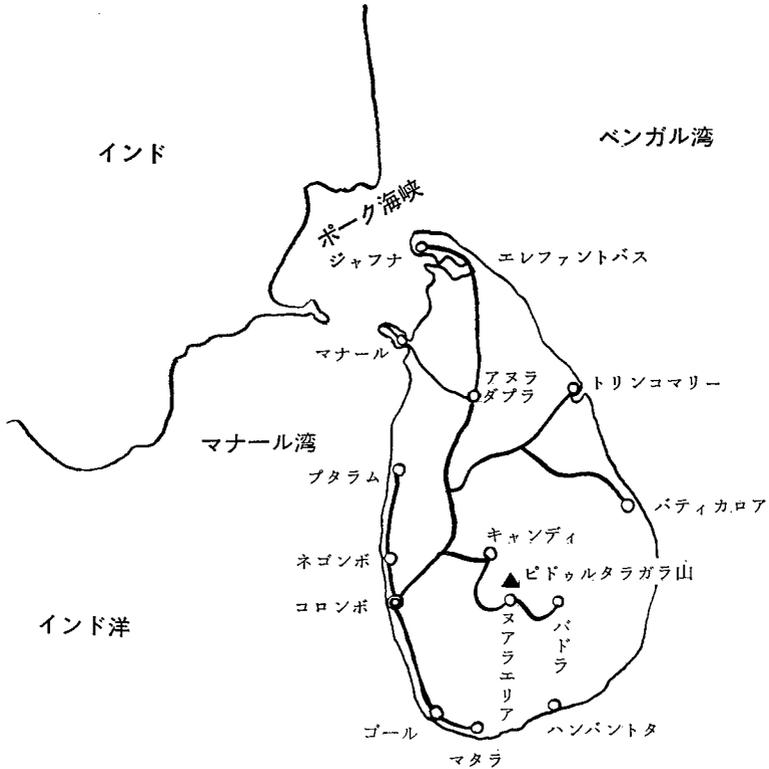
人口 1500 万人 ( 1981 年推定 )

首都 コロンボ

言語 シンハラ語, タミール語, 英語

宗教 仏教, ヒンドゥ教, イスラム教, キリスト教

通貨 セイロン・ルピー



ここには、天然の資源に恵まれず、食しながら明るい人懐っこい顔をもった千五百万人もの人達が住んでいる。このスリランカの南端で鉄道の終着駅でもあるマタラ (Matara) の町を中心に、妻と二人、この夏一カ月間滞在中の機会を得たので、首都コロロンボのような大都市ではなく、人口約三〇万人の地方都市から覗いたスリランカ住民の生活事情を報告してみたい。

帰国後、現地で見聞したことを裏付けるために、アジア動向年報 (アジア経済研究所)、国際統計要覧 (総理府統計局) などを調べてみたけれども、何しろ新しく食しく小さな国のこと、十分な裏付けがえられないものもあり、推測の域を出ないものが多分にある。それらは現地のスリランカの人々が信じ感じていることに基づいているのである。

なお、文中の通貨換算率は、私の滞在中の平均値近くの 1 ルピーを 12 円として計算した。記号 R<sub>s</sub> はルピーの複数形である。

## 二、国家体制

スリランカ (セイロンは英語による地名である) は一九七二年五月、英連邦の支配から離れ、スリランカ共和国として独立し、一九七七年七月、新政権が生れ、国名をスリランカ民主主義共和国と改めたのである。

国名から見る限り、共和国から民主主義共和国になったのであるから、社会主義の路線を進みはじめたように見えるけれども、事実は逆なのである。

独立当初の共和国時代には社会主義を目指し、生産体制をよび公益企業はその殆んどが国有国营であったのである。

例えば、鉄鋼、セメント、陶器、石油、ゴム、木材、合板、紙、塩、砂糖、皮革、繊維、酒、小麦粉、粉乳などの生産加工は公社の形態で、電信、電話、鉄道、運輸（バス）、電力、水道などは直接国营の形態で行なわれた。

また、為替管理もきびしく、国民の海外渡航、輸入なども、したがって、きびしく規制されていた。

国民の財産は、住宅の所有財産制限法によって、住宅の所得や土地の所有に制限を加え、小作料なども規制されたのである。

それが、一九七七年、民主社会主義共和国になってから、資本主義ないしは自由主義の路線に移行しはじめたのである。

もちろん、現在でも、国营のものが大半であり、煙草、プラスチック、陶器、石鹼などの生産は私営であり、バスは私営のものも運行されている。

米、ゴム、ココナツの農園は私有であり、政府援助の対象となっている。

また、経済関係拡大につとめ、外国援助や外資の導入についても積極的で、外資合弁事業として、日本陶器企業との合弁は成功例として有名である。

海外渡航も自由化され、今年の前半だけでも、ホテル・マン、土木建設労働者、家内労働者などの職を求めて八万人近くが旅券を申請し、その半数が中近東諸国に渡航している。

輸入も、外貨事情がよくないので、高関税のもとではあるけれども自由化の方向にすすんでいる。

宗教に関しては、仏教国として有名なスリランカのことであるから、仏教を最高の地位に置き、国家が保護育成している。

しかし、過去において、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地であったという歴史から、かつて砦のあった地区には多くのキリスト教会があり、その信者も多数いるが、国家が全ての宗教の権利を保証しており、宗教闘争のようなものは見受けられない。

住民の構成は、インド・アリア系のシンハリ族が約71%で、大部分を占め、イギリス統治時代に紅茶農園労働者の不足を補うためにインドから移住させられ、近年、しばしば土地分割独立運動を行っているターミナル族が約11%、アラブから移住し、宝石業を主としているモスリム族が約7%、その他バーガー、ブエダなどの少数民族から成っている。

言語は、それぞれの民族がそれぞれのものをもっている。公用語としては、歴史と民族の数からいって、一応シンハリ語ということになっているが、民族間の意思の交流は英語によって行なわれており、どんな片田舎の役場でも、文書は英文タイプライターで作成されている。

したがって、英語教育は、小学校の初年次から週5時間のカリキュラムが組まれている。大学においても英語の教科書が用いられており、英語が第二母国語の地位を維持している。

諸外国との関係は、統治の歴史から、イギリス、ポルトガル、オランダなどのヨーロッパ諸国との関係が密接であり、住民の関係からか、アラブ諸国とも密接なようである。

また、スリランカが社会主義国ということになっている故か、社会主義諸国とくにルーマニアなどの製品、例え

ば鉄道車輛などが使用されているところを見ると密接なのかもしれないし、東独、中国などの英文宣伝誌が極めて安価に供給されているところを見ると、ある程度の関係がうかがえる。

日本と異っている点は、アメリカとの航空路もなく、アメリカの影響をあまりうけていないようであるということである。

日本との関係は、戦前ヨーロッパ航路の船舶の殆んどは、首都のあるコロンボの港に寄港していたそうであるが、船舶の航続距離が延びた現在はいまあまり寄港していない。

けれども、現在のジャヤワルデ大統領が昭和二十六年、サンフランシスコ講和会議にスリランカ代表として出席した際、日本海軍によって艦砲射撃を受けたにもかかわらず「日本を孤立した存在としてではなく、アジアの一員として考え、共栄の友として考える。したがって、わが国は日本に賠償を要求しない」と告げ、「また、憎悪は憎悪によって消えるものではなく、愛によって消えるものである」という仏陀の教えをもって「アジア諸国は日本と仏教文化で結ばれている。いま一度日本にチャンスを与えるべきだ。われわれは日本に友好の手を差し伸べよう」と演説したことは有名であり、その日本が発展してからは、漁業訓練センター、漁業基地、電話通信装置、TV放送設備、病院などの建設に助力し、肥料その他の物資を贈り、大変感謝され、密接な関係を保っている。

また、貿易の面でも、日本製品はヨーロッパやアフリカなどの製品と競い、その優秀さは全国民に認められ、高い信頼をえている。

新聞にも、毎日とわいい程、日本に関する記事が載っており、その内容は好意的である。

私の滞在中、英字新聞セイロン・デーリー・ニュース（八月二十日付）の社説に『日本の雅量』と題して、大き

く頁をとった一文が載っていたのでそれを紹介しよう。

最近、ペラデリア大学の付属病院建設に対する七億ルピー（約八十億円）の寄付は、スリランカに対するアジアの大国日本からの好意のしるしである。

この日本からの寄付は、一九七九年大統領の日本訪問に対する答礼としてあたえられたものであるけれども、今日、日本はアジアの指導的国家というだけではなく、世界の最も発展した国の一つである。

日本は、アジアが技術の面で、西洋に負けないということを示している。

また日本は、人類に意思の力があれば、多くのハンデキャップを乗り越えて、経済の復興が可能であるということを示していた。

日本の進歩の重要な要素は、献身と努力であるということを示しており、われわれを援助することによって、多くの発展途上国に関心をもっているということを示した。

もし、日本の歴史が、他のアジアの国々と比較して、特に有利な点があるとすれば、それは日本が植民地化されなかったことである。

もちろん、ある時期、日本も外国の占領下におかれていたけれども、われわれの国のようなものではなく、形式的なものであった。

戦後の日本に対するアメリカの接し方は、その後の、他の地域におけるような冒険的なものではなく、信頼の上になったものであった。

また日本は、今日、発展の最高水準に達しているけれども、その過程において、一国の繁栄は、他国との協調

が必要であるということを認識している。

他国の人々の苦境、とりわけ貧乏な人達の苦境は、いづれ裕福な社会に反応するであろうし、疾病、飢餓、貧困および欲望といったものは、しばしば連鎖反応をもたらすものである。

それ故、日本の最近における雅量に富んだ行為は、われわれの新しい資本である健康と厚生福祉を維持するのに大きく役立つであろう。

日本からの贈物は、恵まれない国民に対する関心として、人道的な立場から、奨学資金、技術援助、訓練、医療施設、学問の分野、文化向上などに注意深く選択して行なわれている。

もちろん、他の国々も、生活水準向上に努力しているスリランカを援助してくれた。

日本や他の援助国に対し、スリランカは深く感謝する。

### 三、国土と人口

スリランカの面積は六五六一〇平方kmで、しばしば北海道と比較されるけれども、北海道の約80%という小島国であり、人口は一三九七万人（一九七七年）で、北海道の人口の2.7倍もいるのである。

一九七〇年から一九七七年の平均人口増加率は日本の1.3%よりも大きな1.6%であり、もちろん、北海道の0.96%よりも大である。

表の資料は一九七七年のものであるから、今年（一九八一年）の人口を、表の人口増加率で計算してみると、

$$1397 \text{ 万人} \times (1.016)^4 = 1488.58 \text{ 万人}$$

となり、スリランカの人々が現在の人口は一五〇〇万人といっているのと一致する。

	面積 <sup>km<sup>2</sup></sup>	人口 (1977年) 万人	1970～1977年 平均増加率	人口密度 <sup>km<sup>2</sup></sup> 当り	2,000年 予 測	人口 (万人)	人口密度 <sup>km<sup>2</sup></sup> 当り
日 本	377,619	113,866	1.3 %	306人		132,933	352人
北 海 道	83,515	5,244	0.96 %	66人			
スリランカ	65,610	1,397	1.6 %	213人		21,344	325人

※資料 国際統計要覧

※資料 国際連合資料

人口密度は一平方km当り、二一三人で日本の約七〇%、北海道の約三・二倍というかなり高い密度である。

しかし、首都コロンボの人口は現在約六〇〇万人、旧首都キャンデイの人口は二〇〇万人といわれているので、この二大都市の人口で全人口の半分以上を示めており、この二大都市を離れば、それ程の人口密度は感じさせない。

とはいうものの、ポルトガル人が一五〇五年南西海岸に漂着し、占領した約五〇〇年前の人口は約一〇〇万人といわれ、その頃は、椰子の実であるココナツやバナナをはじめ、十分に食料が自給できた豊かな国であったろうと想像される。

国際連合の推測通り、二〇〇〇年に人口が二二三万人にでもなったならば、人口密度は、現在の日本よりも高

い三五二人になるのである。

そこで、政府は、男女を問わず、病院で避妊手術を受けた者は、この場合、この国の医療は社会化されているので手術料は無料で、別に平均月収の半額以上にあたる五〇〇Rₛ（約六千円）を支給するなどの方法で、人口の増加をなんとかして押えようと努力している。

現在、この国の産業は、ゴム、椰子、バナナ、紅茶などの農園を含めた農業が中心であり、農地用地の面積比率は次の通りである。

農 地 面 積 比 率 (%)

—1976年—

	全 体	耕 地	樹 園 地	牧 場 牧 草 地	森 林	そ の 他
日 本	100	11.86	1.65	1.36	66.79	18.00
スリランカ	100	13.64	16.52	6.69	44.19	17.63

※資料 国際統計要覧

この表からわかるように、耕地比率は日本と大差ないが、ゴム、椰子、バナナなどの樹園地は、比率において日本の10倍以上である。

牧場・牧草地も日本より大きな比率である。森林に関しては、比率において日本の約 $\frac{2}{3}$ と小さい。木材はマホガニーやジャックなどがあり、住宅はコンクリートや煉瓦を主体としたものなので、材木は自給できている。

なお、農業を主とした農林水産業人口及び農業水産業従業者数・比率は次の表の通りである。

農林水産業人口及び農林水産業従事者数

— 1977年 —

	農林水産業 人口	従事者数	従事者対経済活動 人口比率 (%)
日本	14,792 (千人)	7752 (千人)	13.2%
スリランカ	8,755 (千人)	2689 (千人)	53.9%

※ 資料 国際統計年度

この表における農林水産人口は、主として農林従業者およびその家族を含めた人数で、従業者経済活動人口比率は、労働人口に対する農林水産従業者数の比率である。

この比率から見ると、労働人口の半数以上である53・9%が、主として農林業に従事しており、その数は日本の13・2%の4倍にも達しているのに、農産物を輸入しているということは、その生産性の低さを示している。

#### 四、雇用と所得

スリランカは、アジアにおいて日本につぐ就学率を誇っているものの、高校を卒業しても、大学を卒業しても、就職が困難であると人々は口を揃えているのである。

統計数字では、失業率は12%前後であるが、感じとしてはそれ以上のものであるし、失業の時点が一度就職しからのものではなく、多くは学校を卒業した時点で就職できなかった失業なのである。

彼等は、賃金をサラリーとインカムにはっきり分類し、サラリーは公務員のような安定した立派なものの収入であり、インカムは大工や一般労働者のように不安定は職業のものであるといった感じで、賃金 (wage) という用語が通じにくかったのにはびっくりした。

新聞などの媒体による募集広告は、求めにくい職種・人材に重点が置かれるのは当然であるが、募集広告に載っている職種が日本と逆なのである。

日本の場合でも、立派な企業の立派な職種が載っていないというのではないけれども、現在、安定した立派な職業についている人達を魅了するようなものは少い。

それに対して、スリランカの募集広告は、一流の優れた経営者、技術者、工場長など立派な経験や技能をもっている人達でなければ応募できないような立派な職種が殆んどであり、いま一つは、公募を原則とする公務員の募集広告である。

公務員は別として、新聞に載っている募集広告の職種は、一般賃金の10倍以上で、その国では、銀行員以外では珍らしいといわれるボーナスまで出るといのである。

これは、今後、発展を遂げようにも、このスリランカでは、優秀な経験をもった経営者や技術者が少く、社内や社会において自給できる体制が整う段階に達していないということを示しているにちがいない。

また、これら人材募集の条件は、小学校一年生から英語を学び、大学の教科書を使用して勉強したのであるから、彼等にとってはそれほど困難な条件ではないけれども、専門分野の能力とは別に、英語を話し、英語の読み書きができるということである。

これだけ人材が不足しているのに、外国に留学したり、外国で技術を習得したりした人達がスリランカに帰国したがないで困るというのをしばしば耳にした。

また、スリランカにいる技能を身につけた人達、例えば大工、左官などが、高賃金の中近東諸国に稼ぎに出かけるので、技能者が不足して困るという話をしばしば耳にした。

私の知り合った、近くサウジアラビアに稼ぎにでかける建築技術者は、「スリランカについては大きな建築の仕事がないので、出かけるのだ」ともいっていた。

共に事実であろう。誠実で英語ができるということ、低賃金を支払ってもスリランカ人にとっては5倍以上という高賃金であるということから、ホテル・マン、家内労働者、建設労働者などが、多数中近東諸国に稼ぎにでかけるといふことは、スリランカ国内における就職機会の少さと低賃金によるのであろう。

彼等の海外での賃金は、新聞による募集広告によれば月収5万円位がモードであり、10万円どまりである。

スリランカの賃金は、物価と比較し、日本と比較した場合、想像以上に低い。名目的には、過去20年間で一般労働者は約10倍になっているが、コロンボ地域以外の物価指数、賃金指数も公表されておらず、それらでさえ確実なものとはいえないので実質賃金の把握は困難であるけれども、実感として、実質賃金はあまり上昇していないように思われる。

この国では、生産機関などの殆んどが国公営という国家の体制から、月給賃金労働者の多くは、公務員と公社従業員である準公務員であって、賃金を観察する場合、どうしても彼等が中心になる。

この公務員達の賃金が一九七六年に月額25 Rₛ (約三百円) 増額され、一九七七年には月額25%、最高50 Rₛ (六百

円)増額されただけで、現在も、諸物価と比較して大変低賃金なのである。

私が耳にしたり、新聞で見たりした例をあげてみると、大学卒の医学研究技術職である公務員の月給は、

勤続 3 年	月給 610 R <sub>s</sub> (7,320 円)
〃 9 年	〃 810 R <sub>s</sub> (9,720 円)
〃 30 年	〃 930 R <sub>s</sub> (11,160 円)

という低さであり、高校卒で英語、シンハリ語、タミールが出来るという国鉄のアーナウンサーの場合は、  
勤続 5 年 月給 550 R<sub>s</sub> (6,600 円)

であった。

一般公務員の場合、

高校卒	勤続 3 年	月給 400 R <sub>s</sub> (4,800 円)
	〃 5 年	〃 550 R <sub>s</sub> (6,600 円)
	〃 10 年	〃 700 R <sub>s</sub> (8,400 円)
大学卒 (ノンキャリア)	勤続 20 年	月給 900 R <sub>s</sub> (10,800 円)
(キャリア)	〃 〃	〃 1,200 R <sub>s</sub> (14,400 円)

位であるということを私自身確めた。

公務員であっても、警官の賃金ベースは独立の年である一九七二年以来、軍人のベースは一九六九以来変化せず、  
やっと来年である一九八二年一月にベース・アップが行なわれるという記事を新聞で見ただけども、確認できかな

った。

公務員の募集は原則として公募であるので、しばしば新聞紙上に募集広告が載っている。その際、職種・資格条件と共に、月給としては次のように、初任給と最終月給および中間の昇給額まで提示されている。

R<sub>s</sub> 680 — 10 × 40 — 1080

R<sub>s</sub> 680 — 40 × 10 — 1080

R<sub>s</sub> 700 — 5 × 10 — 10 × 15 — 900

第一列の例は、初任給六百八十R<sub>s</sub>。で、毎年10R<sub>s</sub>ずつ40年間昇給を続け、最終すなわち40年後には千八十R<sub>s</sub>に達し、それがこの職種の最高月給であるということを示すのである。

第二列の例は、初任給六百八十R<sub>s</sub>、毎年の昇給額は40R<sub>s</sub>、昇給期間は10年間で、この職種の最高月給は千八十R<sub>s</sub>で頭打ちであるということを示している。

第三の例は、初任給七百R<sub>s</sub>、最初の10年間は毎年5R<sub>s</sub>の昇給、つづく15年間は毎年10R<sub>s</sub>の昇給で、この職種の最高給は九百R<sub>s</sub>であるということを示している。

見方によれば、このような表示の方法も内容は日本の場合と同様であるが、職務の内容が初めから高度なものや激務のものは初任給が高く、経験を必要とするものは毎年の昇給額が大きくなるほど、職種を細分割し、前もって決定する方法は、もし合理的にできるならば悪平等などよりも興味のもてる方法であると感じた。

一般公務員達の賃金体系は入手できなかったが、私が実際に本人達に聞いてみた感じでは、月給一万円を得ることとはそう容易なことでないようであった。

物価と比較すれば容易に理解できることであるが、月給以外の所得がなければ生活できない程低い賃金である。しかし、彼等の多くはミドル・クラスを自負している。

所得税、は勤労所得の場合、月二〇〇〇R。(二万四千元)、事業(商底を含む)所得の場合、月五〇〇〇R。(六万円)を超えなければ課せられないということで、所得税を課せられるのは極く少数の限られた人達である。

所得税を支払っている人達も、政府が所得税収入を期待するところまでいっていないのか、同業と語り合つて、バランスをとつて、適当に申請し、適当に払つてゐるということであつた。

税金が少いということは、政府も大変だと思はせるけれども、同時に、寶石や紅茶の輸出に際して関税を課したり、飛行場における無関税煙草を他国のそれよりも僅か高値にしたりすることによって、少しでも国家収入を増加させようとするような方法は、短期的な視野にたったもので、経済学における需要の弾力性理論に反したものだと思わせる。

— 経 営 論 集 —

一般の労務者の賃金も聞いてみた。それによると、

一般労務者	1日	30 R。(360円)
大工、左官	1日	50 R。(600円)

が標準だということであつけれども、大工の仕事振りを見ると電気大工道具などは所有せず、日本の大工の $\frac{1}{10}$ 以下の能率しかあげえないように思われた。

また、土工の仕事振りをみても、手仕事が殆んどであつた。

出来高払いの賃金の例では、二、三十メートルもある高い椰子の木に登つて椰子の実をとるのを業にしている人

は、一本の木に対して1 R<sub>s</sub> (12円) 受取るのだそうである。注文さえあれば一日に五、六十本の木に登るそうであるが、それにしても危険な仕事であり、低い賃金である。

また、ある丘の上の建築現場に、丘の下から煉瓦を運び上げているのに出会った。頭の上に板を乗せ、その上に煉瓦を一度に20個並べてもらって運び上げるのである。千個の煉瓦を運んで25 R<sub>s</sub> (三百円) の手間賃だというのである。家族総出でやっていただけでも大変な仕事である。

このように観察してみると、国民全部が全く貧乏のように見えるけれども、彼等の言葉に従えば『手の五本の指の長さは同じではない』で、医者、弁護士、ビジネスマンなどには高い所得を得ている人達もいる。

金利所得も見逃せない。中央銀行であるセイロン銀行ですら期間二年の定期預金に対し年金利22%、投資会社などはなんと30%もの利子を支払って資金を集めようとしている。しかも、預金利子に対しては全くの無課税である。

資金が不足していることは理解できても、いかに高金利を支払うとも、国民所得が低くければ、その関数である預金は増大するはずがなく、唯、一部の富裕な階級を富ますだけのように思えて仕方がない。

資金をもっている人は、預金することによって、現在のところ、物価上昇をはるかにこえる多額の利子所得を手にすることができるのである。

また、スリランカは経済的にも小国であり、通貨ルピーよりも、ドル・ポンド・マルクなどの通貨がより安定していると考えるのは無理のないことである。

そこで、海外に居住しているスリランカ人の預金、スリランカに居住している外国人の預金に目をつけ、セイロン銀行は、それらの預金を外貨で自行に預金させようと外貨立ての預金制度を設け、利子は外国よりも実質的に高

いものを支払うとするのである。  
すなわち、

アメリカ・ドル	年	11・5%
イギリス・ポンド	年	10%
ドイツ・マルク	年	8%
スイス・フラン	年	5%

の利子を預金同種の外貨でつけ、預金の引出しをその外貨でさせるといふ制度を一九八二年一月から取入れるのである（スリランカ・オブザーバー紙八月二十三日記事）。

これは、スリランカの外貨保有量をなんとかして少しでも増加させようとする涙ぐましい苦肉の策であろうと思われる。

—— 經 営 論 集 ——

次に、農地主の不労所得である小作料について、直接地主から聞いたところを紹介しよう。

農地は、一九七三立法の住宅財産制限法によって大地主はなくなつたけれども、農地は地主によって所有され、小作人によって耕作されている。地主は日本同様、先祖から子孫に渡す責任を感じており、土地に執着をもち、余程のことがなければ手離さないし、結婚によって地主階級が維持できるようになっている。

結婚に際して、富裕な男性と結婚する女性は、一生富裕な生活ができるのであるから、それに相当する資産を持つるのである。したがって、富裕な階級の子女しか富裕な男性と結婚することができず、結婚する際に農地を持つことが多くというのである。

小作料は、独立以前には小作人につらく、75%もとられていたのが、現在では、25%が地主に、75%が小作人の所得となるようになったのだそうである。

しかし、その比率は実質的な収穫量によるのではなく、政府が1エーカー当りの収穫量を定め、それによって分配が行なわれている。例えば、米の場合、1エーカー当りの米の収穫量を32ブッシュルと規定し、その1/8のブッシュルが地主に手渡されるのである。

この25%という比率は地域によって異なり、土地が肥えていた収穫量の大きい地域では1/8の収穫量を地主に小作量として支払うのである。

## 五、物価と生活

資源に恵まれない発展途上国であるスリランカでは、公共料金、国産品、輸入品がそれぞれ別個の価格本系をもっている。

公共料金は政策的ということと、賃金の低さから、電気、水道、汽車、バスの料金は非常に低く、一般化していない電話の料金は大変高い。

電気・水道は料金ではなく、電気税、水道税と呼ばれている。しかし、ここでは我々の理解を容易にするために、料金と呼ぶことにしよう。

電気料金は、

電気料金月額 =  $8 R_s + 0.14 R_s \times$  (使用 KVA/時)

// =  $96 \text{ 円} + 1.68 \text{ 円} \times$  (使用 KVA/時)

で計算される。すなわち、基本料金が約九六円、従量 1 KVA 時が一円六八銭と日本とは比較にならない程低い。

これは、首都キャンデー地区にあるかつてのアジア最大を誇った水力発電装置や、一九二五年製という古い水力発電装置によって、現在、余程のことがない限り、一〇〇%水力発電によっているからである。

したがって、エネルギー価格としては、LPGよりも薪よりも、とにかく安いのである。そのため、日本では見かけないような電熱器具、例えば電熱器が組込まれている薬缶などが市販されている。ただ、それらの器具が所得に比して高価なため一般化はしていない。

電力にそんな恵まれているのかという決してそうではなく、雨は神の恵みによるものであるから、節電するようにと政府は常に国民に呼びかけている。

今後、工業化が進み、生活水準が向上して電力使用量が増大すれば、どうしても火力発電などによって補なわなくてはならなくなり、石油料金の高い今日、電気料金の急上昇はまぬがれない。

現在でも、水不足によるものか、古い発電機の故障によるものか、送電技術未熟によるものかは別にして、毎日、一、二回は停電し、ときには、それが数時間に及ぶこともあるので、どの家庭でもカンテラを用意している。

そのうえ、電球の輝度の低下や扇風機の回転数の低下が肉眼でみえるほど電圧が低下するのである。このような停電や送電力の質の不安定の結果か、新聞広告に、世界各国製の自家発電装置が小さいものから工場用の大容量のものまで毎日載っている。

電力の安定供給は、産業発展のための重要な条件の一つであると考えられるのに、ここにも大きな隘路がある。水道料金は、一般家庭においては四ヶ月50 Rₛ（六百円）という定額である。したがって一カ月約百五十円と大変低い。もちろん、ホテルや工場などの大口消費者はメーター制による従量料金だそうである。

しかし、スリランカの新聞に、ヨーロッパ、アジアで、水道の水が飲めるのは日本だけであり、発展途上国では、水に起因した疾病で、毎年、多数の乳幼児が死亡しており、スリランカの水道も、早く日本のような水道にして欲しいという要望が載っていた。それに政府が答えて、資金が調達でき次第、早くそうしたいといったのが印象的であった。

電話は、日本同様、即時ダイヤル方式である。しかし電話設置は未だ一般化しておらず、政府機関、大商店、弁護士などが設置している程度で、公衆電話も市中には全くみあたらない。

電話線も裸架線が多く、電話架設も距離によって工事費が異なり、ある例では20万円もしたそうである。

電話の基本料金は、私のいたマタラの町で

個人宅 月額 六〇〇Rₛ（約七千二百円）

事業所 月額 二二〇〇Rₛ（約一万四千元）

で、市内通話料は一通話1.6 Rₛ（約二十円）もするそうである。

電話の自動交換装置やマイクロ・ウェーブ市外通信網なども世界各国の技術援助によって建設されている。例えば、私の滞在したマタラのもものは日本の技術で、旧首都キャンデイのもものはオランダの技術によるものであった。

マタラでは、日本の電話技術が高く評価されていた。小国において、世界各国の技術が、展示場において競

い合っているような感じである。

交通運賃に関しては、交通事情の項で取扱うので、ここでは取扱はない。

一般物価は、世界の都市における物価表が、今年9月8日付の東京新聞に載っていたので、比較できるものは、それとスリランカの物価を比較してみたい。(次頁参照)

ワイシャツは、低いスリランカの労働賃金で縫製加工しているので安く、一〇〇Rs (千二百円) もだせば入手でき、輸入生地を使用した最高級品でも二〇〇Rs (二千四百円) 位で世界一低い価格のようである。

スリランカの若人は、半袖よりも長袖のワイシャツをまわって着用するのが流行のようであり、品質もよく、ここで比較してもよいように思われる。

この品質と価格に目をつけたのであろう。香港の商人がアメリカ輸出を試みていた。スリランカの軽工業の発展ということからよろこばしいことである。

牛肉は、ヒレーやロースなどわけて売っているのではなく、枝肉のままぶら下げて売っているのである。品質も悪く、比較の対象にはならないであろう。

この国が仏教国であるからか、牛肉を食べない人も多く、人口30万人のマタラの町で一日に三頭屠殺されるだけであり、それも仏教国の故にやめるようにという声まであがっている。

需要が少ない故か、牛の飼育も、路上といわず草原といわず、あまりない草を求めての放し飼いで、肉はかたく、味も悪く、ミルクもあまり出ず、食肉類のうちで一番下級品なのである。肉類の価格は、

牛肉 1 kg 16 Rs (一〇〇g当り 一九・二円)

### 世界23都市の物価と1人当たりGNP（国民総生産）比較

（単位・円）

都 市	国	ワイ シャツ （1枚）	牛 肉 （ヒレキロ）	ジャ ガイモ （1キロ）	マン ション 100 ㎡1 ヵ月 賃貸料	調 髪料 金（男 性）	ト イ レ ッ ト 紙 （1 ロー ル）	郵 便料 金（封 書）	自 動 車 （2 000 cc）	1 人 当 た り 国 民 総 生 産
東京	日本	4,800	7,000	200	300,000	2,200	50 60	1,300,000	1,928,700	
バンクーバー	カナダ	3,730	2,870	136	130,000	2,800	86 32	1,615,000	2,114,900	
ロサンゼルス	アメリカ	3,250	1,970	193	202,000	2,600	78 40	2,130,000	2,371,400	
ニューヨーク	アメリカ	3,360	1,290	139	202,000	2,000	85 40	1,794,000	2,371,400	
メキシコシティ	メキシコ	6,020	2,450	111	278,000	1,800	106 7	2,500,000	348,480	
サンパウロ	ブラジル	6,390	1,150	128	110,000	3,100	166 18	2,550,000	370,400	
ブエノスアイレス	アルゼンチン	16,000	1,120	184	400,000	4,000	184 72	4,800,000	499,700	
ロンドン	イギリス	3,250	3,030	153	403,000	2,300	107 65	2,324,000	1,389,500	
パリ	フランス	2,620	2,820	81	161,000	2,400	50 56	2,081,000	2,178,600	
ブリュッセル	ベルギー	3,540	2,360	118	106,000	1,800	88 53	1,296,000	2,386,800	
ジュネーブ	スイス	3,850	1,900	163	125,000	2,900	77 58	1,803,000	2,570,900	
ミラノ	イタリア	4,750	3,230	76	152,000	1,700	48 38	2,375,000	1,148,500	
カイロ	エジプト	2,600	1,240	49	228,000	650	114 7	4,389,000	100,800	
ナイロビ	ケニア	3,030	1,210	151	15,000	3,000	91 15	6,054,000	83,300	
ラゴス	ナイジェリア	8,910	3,960	1,584	1,402,000	1,800	158 40	4,553,000	146,800	
クウェート	クウェート	4,030	3,220	201	604,000	1,600	121 12	1,611,000	3,785,100	
シンガポール	シンガポール	3,070	1,150	118	266,000	2,000	51 10	3,158,000	837,200	
バンコク	タイ	2,710	1,550	138	138,000	400	50 14	4,287,000	129,300	
ジャカルタ	インドネシア	9,000	2,160	216	180,000	1,800	126 36	5,200,000	83,300	
ホンコン	ホンコン	3,890	1,480	328	697,000	800	41 8	2,050,000	876,700	
ソウル	韓国	3,960	3,470	231	413,000	3,000	132 13	5,280,000	328,800	
シドニー	オーストラリア	6,640	1,530	102	155,000	1,300	179 56	2,044,000	1,994,400	
オークランド	ニュージーランド	5,120	1,510	119	109,000	800	81 40	2,619,000	1,301,900	

（注）1人当りGNPは1979年世界銀行調査。円換算は1ドル=約220円。

※東京新聞 1981年9月8日

豚肉	1 lb	12 R <sub>s</sub>	(100g当り 三二・〇円)
鶏肉	1 lb	13・5 R <sub>s</sub>	(100g当り 三六・〇円)

と、日本の逆であるけれども、味は価格に比例している。

とはいうものの、鶏もあまり手間をかけて飼育していないようで、肉に味はなく、鶏卵も品質が悪く、1個1 R<sub>s</sub>(十二円)であるけれども、黄卵と卵白との区別がつきにくいほど黄卵が黄色でないのである。

ジャガイモは、1kg当り9 R<sub>s</sub>(一〇八円)で日本よりは安いけれども、世界の平均程度である。

マンシヨンの賃賃料は、コロンボなど大都市にはあるのかもしれないが、私の滞在したマタラの近くにはマンシヨンはなかったので比較はできない。

調髪料金は、技術の質にも関係があるので簡単な比較は困難であるが、質を度外視すれば、高くなったという現在でも5 R<sub>s</sub>(六〇円)で大変低い料金といえる。

しかし、質を問題にすれば、椅子も調髪用のものではなく、襟元を剃るのに水も石鹸を用いず、洗髪もせず、いわゆる刈込みというのであり、技術水準も高いとはいえないものであった。

トイレット巻紙は、水洗便所が普及していないので一般的ではなく、輸入にたよっているので高価である。私が購入したのは中国の上海製のもので、1ロールが16 R<sub>s</sub>(一九二円)で日本の四倍もした。

郵便料金については、機会がなく国内郵便料はわからないが、外国向けの航空書簡は3.5 R<sub>s</sub>(四十二円)で、日本の半額以下であったから、国内郵便料も低いであろう。

自動車は、全部輸入にたよっており、新車の輸入関税一〇〇%が課せられるため、クーラーもついていない二〇

○○ccクラスの自動車の価格は2ラックス(二三〇万円)もするのである。

なお、輸入されている新車・中古車の殆んどは日本製である。

次に、前場の表の右端に載っている1人当り国民総生産を、一九七六年から一九七八年までの平均成長率一七・二三%によって推定してみると、次の表のように、

### 1981年スリランカ1人当り国民総生産推定

年	1976	1977	1978	1979	1980	1981
Rs	2,057	2,489	2,827			4,555
円						54,657

※資料 フジフ動向年報1980 平均成長率17.23%

四、五五五Rs。(五四、六五七円)となる。

これは、ケニアのナイロビやインドネシアのジャカルタの八三、三〇〇円よりも低い。

日本の1人当りの国民総生産は、表によれば、一、九二八、七〇〇円であるから、スリランカの35・3倍ということになり、スリランカのそれはいかに低いかということがわかる。

次に、表以外の農産物の価格を考察してみよう。

米、これは年に三度も収穫でき、以前には輸出もしていた。しかし、現在は上級米の一部を輸入し、殆んどは自

給でまかっている。

住民の多くは国産米を原米のまま食しており、ときによっては精白した白米を、また一部富裕階級は輸入された上質ロングライスを食している。

米の価格は、

国産原米	1kg 当り	5.65 R <sub>s</sub>	(68 円)
国産白米	1kg 当り	7.00 R <sub>s</sub>	(84 円)
輸入ロング・ライス	1kg 当り	30.00 R <sub>s</sub>	(円360)

で、品質によって大きな格差がある。それにしても、日本の米の価格よりも低い。

国産米は好みの相違からきたものか、肥料が高価であるといつて施さなためか、原皮が日本米の黄色とちがって赤茶色であり、日本の米とは異質のものである。

玉ネギは、土地がやせているためか、国産品はピンポン玉大のサイズであり、印度のボンベイ産の品なのか、ボンベイとよばれる輸入玉ネギは日本産並のサイズで、価格は、

国産玉ネギ	1kg 当り	4 R <sub>s</sub>	(48 円)
輸入ボンベイ玉ネギ	1kg 当り	6.5 R <sub>s</sub>	(78 円)

で日本の半値以下である。

ソーセージなどの食肉加工品は、所得の関係から一般的な食品ではない。しかし、首都コンボに本拠をおくエレファント・ハウスというチェーン・ストア一軒だけが生産販売しており、冷凍車で運搬するので、生産工場のあるコ

ロンボから60 Kmまでの地点と、それを越えた地点での価格は差別されている。マタラの町は60 Km以上離れているので高いほうの価格で販売されているが、販売単位は1ポンドで、それを一〇〇g単位と合せて表示すると、

	1 ポンド当り	100 g 当り
ピーフ・ソーゼージ	12.7 R <sub>s</sub> (152 円)	34 円
ネーク・ソーゼージ	13.95 R <sub>s</sub> (167 円)	37 円
パタヤー・ソーゼージ	19.95 R <sub>s</sub> (240 円)	53 円

となり、日本と比較すると安く、品質もまあまあのものである。

**食用油**は、落花生や胡麻からもとれると思はれるのに、生産量が少いのか、国産油は椰子の実のココナツからとられる椰子油だけである。これは、上質の食用油ではないとして、上流階級に属している人達は中国から輸入されている大豆油を用いている。

中国産輸入大豆油は、国内農業保護関税のためか、1ℓ一二〇R<sub>s</sub> (一四四〇円)もし、大変貴重がられている。料理に適したこの種の食用油が高価なため、住民はフライなどの料理を口にすることは容易でない。したがって料理も単純なものになり、油脂の摂取量も少い。これは健康上どうなのかは判断する能力をもちあわせていないけれども、彼等の好みから判断すれば、是非、農業を奨励・助成して、上質な国産食用油を供給するようにしたいものである。

**魚**は、近くの海岸からも出漁するし、40 Km離れたゴールという町からも出漁し、需要は十分にまかっている。このゴールの町には日本の援助による漁業基地もあり、夕方6時頃、丸木舟の尾部に日本製のボート用船外エンジ

ンをつけ、20トン位の小型船を母船として出漁し、朝方帰港し、市場や近くの路上に並べて販売している。  
 このようにして漁獲されるのは、マグロとシア・フィッシュ (sear fish) とよばれるサバ科のものが主である。  
 しかし、小アジのような魚は一本釣りとよばれる方法で漁獲されている。

一本釣りといえば豪快にきこえる。しかし、実際は、原始的な迂回生産以前の方法で、舟もなく網もない漁師が行っているみじめな漁法なのである。

漁獲手段をもたない漁師達が、それぞれ海岸沖に丸太棒を一本打立て、それに竹馬の足をのせる台木のようなを取付け、暑くない朝未明と夕方、一人で釣る方法であって、漁獲量も少く、人にいわせれば、「最も無能な人達」であったり、「最もなまけ者達」であって、不思議なくらい痩せきっていた。

魚の価格は一尾売りで、

	マグロ、シア・フィッシュ類	
	1ポンド 100g 8.5 ~ 16Rs (100円 ~ 190円)	
	100g 100g (23円 ~ 43円)	
ニ	魚	
	1ポンド 100g 10Rs (120円)	
	100g 100g (27円)	

位であった。

住民は魚をカレー煮にしたり、上流階級の人達は手製のパン粉をつけてフライにしたりして食するのであるが、日本のような加工品は製造されていないようである。

牛肉をあまり食しない住民であり、四面海に囲まれた国であるから、魚の売方や料理の仕方を研究し、需要が増

大するならば、漁獲法も進歩し、安価に大量に供給できるようになり、国民生活の向上に役立つであろう。

次に**果実**の価格であるが、これは大変安いように日本に紹介されている。事実、バナナ、マンゴスチーン、パイナップル、アバカード、パイヤなど種類・量ともに豊富であり日本円に換算すれば安価である。

それらの果実も、数百年前の人口の少い時代には無価値と思える程安かったのかもしれない。しかし現在では、バナナ一房一〇〇円、パイナップル1個50円、マンゴスチーン1個10円前後であって、彼等の所得からみれば、日本人が日本で輸入果実を購入するよりも相対的に高価である。購入者が少いのには、生産者が換金したため、露店などに並べて売れるのを待っている様が、果実があふれているようにみえるのである。

これは、果実が自分の土地から収穫されるので、生産コスト零、生産量は自然が決定してくれる。そこで、果実の供給曲線は垂直であり、価格を決定するのは自己の生活費をコストとした市場メカニズムによるということである。

輸入財は、この小さな市場に、世界各国から、新旧いろいろなモデルのものがなだれこんでいる。

**TV**は西ドイツのPAL方式が採用されているにもかかわらず、日本の技術援助でもってコロomboTV局が唯一のチャンネルですでに開局している。一九八二年には数局が開局を予定しているので、日本をはじめ西ドイツ、オランダなどの各国から各サイズのTVセットが輸入され、販売広告合戦を演じている。

価格はせまい幅の中で競っているが、日本製品は高価な部類に属しているにもかかわらず評価は優れている。

現地で販売されているTVセットの価格を、日本国内で販売されている同じサイズの価格と比較してみると、日本定価の約2倍、実勢価格の約3倍もし、昭和30年以前の1インチ一万円時代を感じさせた。

電気冷蔵庫は、私の感覚からいえば、衛生上、沸騰水を冷却するための必需品であるが、所得との関係で、極く一部の家庭しか所有していない。しかし、赤道近くの国である。潜在需要が大きいことを知っているであろう。どこの電気店でも店頭が一番正面に陳列している。

日本製よりも南アフリカ製やイタリヤ製が安く、目玉商品のようにして店頭飾ったり、新聞広告によって販売に力を入れているのはこれらの製品である。

技術の差が目に見えないこともあってか、冷蔵庫に関しては、是非、日本製が欲しいという声はきかなかった。新聞広告に載っていた価格を紹介すると、

電気冷蔵庫

南アフリカ製	1 フツ	200 ℓ	11,250 R <sub>s</sub> (13.5 万円)
〃	〃	275 ℓ	13,750 R <sub>s</sub> (16.5 万円)
〃	2 フツ	310 ℓ	16,500 R <sub>s</sub> (19.8 万円)
〃	〃	350 ℓ	18,000 R <sub>s</sub> (21.6 万円)
イタリヤ製	1 フツ	170 ℓ	8,900 R <sub>s</sub> (10.7 万円)

であった。

テープ・レコーダなどの音響器機は、日本製が殆んどで、台湾製なども少々まわっていた。価格は日本における定価位であるが、安いなと思うと台湾などの製品であった。

扇風機はスタンド型のものが主力で、国産品も出まわっており、価格も日本製の半値に近く、一五〇〇R<sub>s</sub>（一万

八千円)位と安く、品質もまああめで中流家庭の多くが所有していた。

自転車は大変愛用されており、日本製はなく、殆んどが中国製で、頑丈にできており、価格も一六〇〇R。(二万円弱)と安く、好評であった。

腕時計は手巻きの国産品が三〇〇R。(三千六百円)と安く、輸入品の殆んどが日本製で国産品の5倍以上で売られておるので、売れにくいであろうと店主に尋ねてみたが、お金のある人は日本製を好むとのことであった。

万年筆はボールペンが普及している故か、それほど一般的ではなく、中国製が一本20R。(二百四〇円)程度で売られていた。デザインはアメリカのものによく似ているが、品質は粗悪であると彼等はいっていた。

電球・電気配線器具は、この国の電圧や仕様が異なっている故か、日本製のものは見かけず、殆んどといっている程、中国製品が使用されており、中国は電気の先進国ではないかと思わせる程であった。電球しか購入する機会がなかったが、60Wの素通し電球が6・05R。(72円)と安く、ヨーロッパ製品のないものうなずけた。

セメントは国内で生産されているが、来年の5月頃までは需要に足りないととして、日本から輸入している。日本製セメントの価格は1袋50kgが90R。(千円余)で、国産品より、僅か10%程高いだけであった。

このスリランカでは、家屋の本体がコンクリートと煉瓦でつくられており、電柱もコンクリート製で、セメントは必需品である。セメントの主原料である石灰石は自給できるにもかかわらず、この20年間にセメント価格は20倍にも騰貴し、住宅事情を困難なものにしている原因の一つもここにあるように思われる。

輸入品の価格は特別なものを除いて、卒直なところ思ったより安かった。輸出価格と小売店の荒利益が10%そこそこと小幅なことにもよるのであろう。販売量が少く、マージンも小さいとはいえ、一般賃金が低いので、それに

比較すれば利益総額はそんなに小さくないようである。

また、日本製品に対する評価はすばらしく高価でも品質がよいということであった。このスリランカで販売されているインドの雑誌に、日本人が買うほどいい品物だという広告が載っていたので紹介しよう。

それは、自動車でもテープ・コーダーでもなんでもすばらしいものを生産している日本人のセールス・マンがVIPというスーツ・ケースを買いにきたというのである。何故、「もちろん品質が優れているからである」。彼曰く、「私の妻も友人もみんなVIPをもっている」と、そして彼曰く「スーツ・ケースだけでなく、ついでに会社ごと全部買ってしまおうか」と、「しかし御安心下さい。VIPは現在もインドの会社です健在です。」というのであった。この広告は、日本人の高慢さをもひねくっており、我々も自省することは必要であるが、自社製品を宣伝するのに日本製品の優秀さの宣伝もしなければならぬというもので、本当に日本製品はそんなに秀れているのかと一昔前と比較して感無量であった。

酒や煙草の嗜好品をたしなむ人は数多くいるけれども、所得から計算して生活に余裕がなく自由にはたしなめない。

酒類は、洋酒なども僅かに輸入されている。しかし一般的ではない。国産の酒は唯一つ、国営でもって、アラック (Arrack) というココナツの花からつくられたアルコール分40%以上の蒸留酒がある。

価格は、七五〇ml瓶詰の中級品が42 Rₛ (五百円) であり、代価のうち5 Rₛ (60円) は容器代でリンク制をとっている。

煙草は私企業で生産されており、輸入葉を使用した上質のものが市販されている。

価格は、高級シガレット、ゴールド・リーフ (Gold Leaf) 12本入り7・20 R<sub>s</sub> (86円)、20本入り12 R<sub>s</sub> (百四十円) であり、一般的なプリストル (Cristol) が10本入り4.7 R<sub>s</sub> (56円)、20本入り9.4 R<sub>s</sub> (百十円) である。

煙草の価格は、したがって日本の半値で、他の財と同様、賃金と比較考察すれ大変高価ということになり、喫煙も容易ではなく、喫煙しない人も多い。

しかし、どうしてもという人のためか、煙草の一本売りが行なわれている。プリストルは20本で9・40 R<sub>s</sub>、10 R<sub>s</sub> 足らずであるから、1本売りにして4 R<sub>s</sub>、列車の中でも、他の店でも販売している。

靴や衣料など被服に関しては、あまり見聞する機会に恵まれなかったけれども、女性はサリーをまとっている人、ワンピースを身につけている人、男性はサロンを身につけている人、シャツとズボンの人、足は靴をはいている人、ハダシで歩いている人いろいろであった。

しかし、ハダシで歩かないと目が悪くなると信じている人が多く、上流社会の人達でも、家庭では庭やセメントの床をハダシで歩くのが通常である。靴をはくにしても厚地のソックスをはき、ナイロン・ストッキングをはいた女性はみかけなかった。

靴の価格は、男性用の表皮、ゴム底のもので一〇〇 R<sub>s</sub> (千二百円) 前後のものが店に陳列してあった。

彼等の**食生活**は、あまりうかがい知ることできなかったが、チリなどのホットな香料を中心とし、小麦粉を混ぜない手製のカレー汁で野菜を煮込んだものや、ココナツにチリなどの香料を混ぜたものが副食物の中心のようであり、肉、魚、昆布などのだし類は用いず、もっぱら塩味のようにであった。

丁度、私がいた時、新聞にはじめてスリランカに日本の化学調味料が輸入されるという広告がでていた。価格は

5 gの小袋が1 R<sub>s</sub> (一二円)であった。

香料は、チリ、カードмам、肉桂など幾種類もの木の葉や実、根などが用いられているが、私が驚ろいたのはチリが日本の唐辛子のことなのである。調べてみると、チリは中米で発見され、インドに渡り、中国に渡ったというのである。したがって、中国から日本に渡ってきたときの呼名が唐辛子というのであろう。

カードмамは貴重な香料で、木の根についている小さな豆鞘のような殻の中にある胡麻粒のようなものである。これがスリランカにあったばかりに、ヨーロッパ諸国にねらわれたという説もある。

カードмамは、料理にも用いられるが、主たる用途は、貴婦人達が集ったとき、カードмамを数粒かみくだいて口臭を消し、よりよい香りを保ちながら会話をたのしむのに用いるのである。丁度、香水のような役割りを果たすのである。

このカードмамの価格は一〇〇g 15 R<sub>s</sub> (百八十円)であるが、殻ごとの価格であって、中味は極く僅かであり、大変高価な品として取扱われている。

**教育費**は、小学校から大学まで国費でまかなわれており無料である。仏教国であっても、キリスト教系などの学校における学費も無料である。

大学には寄宿舎の設備があり有料であるが、資力のない者には奨学金が貸与される。

また、正規の大学とは別に開放(オープン)大学を開校し、社会に出ている人々を入学させ、現代社会に適合する人材を育成し、国の発展に寄与させようとしている。

唯一つ、私立の医科大学が設置されたけれども、学費が高く、一般の人々の財力では入学できない。

## 六、交通事情

交通機関としては、国内航空、鉄道、公営バス、プライベートバス、タクシー、自家用車、自動二輪車、自転車など種類としては日本同様で、強いていえば主要交通機関は全て国営であり私営鉄道が皆無といった程度の差である。

国内航空は僅かに存在しているといった程度で、使用機種も小型で便数も少ない。

鉄道は単線が主で広軌を採用しており、地図に示されているように、国内全土を網羅するところまではいっていないが、重要な地点は全て結ばれている。

客車は一、二、三等から成っており、一等車の連絡は稀れで、通常は二、三等車である。

この鉄道の車輛は全て外国製であるが、代替交通機関のあるところでは住民から敬遠されている。それは運賃が高いというわけではなく乗心地が悪いということである。

私の乗った列車は、機関車がディーゼル機関のルーマニア製のものであったが、走行中テープ音楽をイヤホンできこうとしてもきこえない程、騒音がすさまじく、丁度日本の列車が鉄橋上を通過するときのようではばらく乗っていると、船酔いのような気分させられた。

帰国後、東上線や国鉄に乗車した際、列車の騒音が音楽のように、なめらかにきこえた程である。

何故スリランカの鉄道はこのようなのか、専門知識のない私が、目前にあるレールを観察してみた。

レールの長さが枕木の数で21本であり、東上線のそれは42本と倍であり、地下鉄の継目は溶接してあった。また、レールの継目がスリランカのは左右ばらばらであり、殆んどが枕木間で行なわれていた。それに対して日本のは左右同時にとか枕木上で接続されるなどの工夫がされている。

もし、こんなところに原因があるとすれば、最も頻度の高いところで1日7往復、低いところでは2往復といった鉄道であるから、レールの磨滅も少なく、新設の際に余程慎重にやらないとレール取替えの機会がなく、後に悔いをのこすことになると感じた。

日本製の機関車も目にした。スリランカの人々が共産圏の列車ではなく、乗心地のよい日本製の列車の輸入を心待ちしているというのをきき、もしレールに原因があるとした場合、日本製が輸入されても同じ結果であり期待を裏切るようなことになったらこまるなど心配させられた。

枕木の殆んどは木製で、ごく一部にコンクリート製が用いられていた。枕木の下は、砂利ではなくて碎石が用いられていたがその厚さはわからない。

鉄道運賃は2等車通賃で日本の半以下という安さである。急行列車はなく、快速列車はあるけども特別料金は少ないのであるから大変低料金ということになる。

鉄道網の敷かれていない地域や都市内は、運輸省経営のCTBバスが運行されている。車輛は大型で古いものが多く、その殆んどは英国レイランド製であり、新しいものは日本製が多い。このバスは、車台を輸入し、車体はスリランカ製なので型は統一されている。

バス料金は、交通料金としては最も安い。

私は市内バスに乗ってみた。車輛の古いことよりも、料金がマタラの町では1 R<sub>s</sub> (十二円)、キャンディ市では0.8 R<sub>s</sub> (十円) と安いのに驚ろいたが、それよりも車掌の仕事の大変なのに驚ろいた。

車掌は満員の乗客の車中で運転中に、カーボン複写になっている部厚な料金領収書綴に、均一料金であるのにその金額と、自分のイニシアル・サインをし、一人一人の乗客に手渡すのである。それは本当に大変な仕事である。これは国营バスということと、社会主義国における能率無視の事務管理の名残りだと思った。

新政権になって、交通機関の不備を補うものとしてプライベート・バスが認可され、成功した政策の一つに数えられている。

これは、国家に資金がなく、民間に資本の蓄積がなく、すぐにバス会社の設立は困難なので、マイクロバス一台ずつの所有者が一つの協会をつくり、各人のマイクロバスを持ち込み、料金、運行時間を調整し、需要のある都市間を走る定期・不定期バスである。

車輛は全て、日本製のマイクロバスの新車と中古車であった。

運賃は鉄道の二等料金と三等料金の央ばで、席は指定席であり、乗心地は鉄道より優れているというので大変好評である。

しかし、原価計算をしてみると、バス一台の乗客は満席で約30人、マタラーコロンボ間160 Kmの運賃が17 R<sub>s</sub> (二百円) であるから、満席の場合の運賃合計は、往復で一、〇二〇 R<sub>s</sub> (一万二千元余) にすぎず、マイクロバスのスリランカ国内価格は、新車で34万 R<sub>s</sub> (四百万円)、利子は二年定期でもって22%—30%もするのである。燃料は非産油国であるから国際価格である。減価償却費もいれば修理費も必要である。運転手の賃金がいかに低いといっても

採算がとれるはずがない。

車輛保有者にきいてみたところ、日本製のバスは故障しないから修理費は安いし、燃費はいいし、多忙の際には1日2往復(六四〇Km)するから大丈夫だとのこと、減価償却費や資本利子の概念がどうなっているのか、ついに疑問は解決しなかった。まさか、バスの耐用年数を半世紀(50年)として、減価償却費を均等配分しているのであるまい。

タクシーは大きな都市や町にはいる。車種は古い英国製モリスをはじめ様々である。料金メーターを車外に取付けたのもあれば、料金メーターをつけていない白タクのようなものもある。料金は1Km 5Rs (60円)から8Rs (96円)で、都市によって異っている。

私のいたマタラでは、町の中心に20台位のタクシーがいつも客待ちをしていたけれども、ついに、一度も客を乗せたのを見かけなかった。しかし、運転手はいつものんびりしているように見えた。

個人の交通機関としての自家用車が予想以上に多く走っているのにはびっくりした。また、旧式車はなんと一九三〇年代のものだというから驚きである。

自動車税は従価税で、車輛が古くなれば安くなり、車検制度がないので維持費が安く、必要によっては乗用車に10人以上を乗せることができるので大変便利なのだそうである。

このマジック・ボックスのような乗り方にびっくりし、知人の弁護士に尋ねてみたところ「個人の車の場合、乗員数の取締りはない。その方が経済的である」とのことであった。

新しい乗用自動車も沢山走っている。新車の輸入関税ハ一〇〇%、再生車とよくよばれる中古車の輸入関税は40

%だそうである。

したがって、新しくみえる自動車の多くはこの再生車であり、殆んどが日本製の小型車なのである。この価格はルピーで表現されたり、日本円で表示されたりで、二、三年旧型のもので70〜80万円位であった。

日本車の評価は、燃費がよく、故障も少いけれども、車体重量が軽く、操縦性能がよいので、速度感がなく、若人達は速度を出しすぎるといふことであった。

ガソリンは国際商品であり、1ℓ当り10Rs（百二十円）で、所得からみれば大変高く、高所得者ならばともかく、月給が一万円以下の一般階層がどうして車に乗れるのだろうかと思議である。

たまたま、公務員が新しい中古車に乗っているので、その旨尋ねたところ、「自分はハイウェイ・インスペクターで仕事に車が必要であるが、役所には車が十分にならないので自分の車を使用する。それに対して、国家から車の費用が支給されるのだ」とのことであった。公務員の車の持込みなのである。

このように、自分の所得以外、不労所得があるとか、サイド・ビジネスに使用するとか、とにかく何らかの別収入がないと、高価な車、高いガソリンをまかなえないように思われる。

次に私が考えたことは、現在、信頼され好評である日本車が、半世紀の間使用に耐えるであろうかということである。日本車はそんな耐用年数を考えて製造されてはいないのではないだろうか、この国で、耐用年数が短かった場合、日本車の評価はどうなるであろうかということであった。

自動二輪車は、公用私用にかかわらず多数使用されている。燃料節約という見地から輸入関税は無税なのだそうである。輸入されている自動二輪車は殆んど全てが日本製であり、価格も日本の定価並みである。

道路は思ったよりよく整備されているが、歩道・車道の区別がなく、交通信号はなく、センター・ラインもない。路上を牛や牛車、自転車、人間が共に利用している間を縫って車を運転しているのである。ついに私は車を運転しなかつた。

## 七、おわりに

僅か一カ月間のマタラ滞在の経験に基づいた知識でまとめたもので、不完全なものであると同時に、書き足りないことも沢山ある。

TVセット、ラヂオ、電話など文化的なものから離れての生活であつたので、気温なども計れなかつた。

しかし、笑顔をもつた親切な住民の中での生活はたのしく、無意識のうち身につけた知識によつたもので、つい日本と比較しがちになり、本意でない表現があつたとすれば、それは表現力の不足である。私は、彼等の親切に機会があつたら是非報いたいと思う。

また、いま一度、訪ねてみたいものである。